

教育長だより No. 6

2022年4月27日

琴線(きんせん)に触れる

～ 子どもを口で泣かしたら一人前の教師や～

私は、若いときにこんな言葉を先輩から聞きました。「どついて泣かすんは簡単や。けど、中学校はあとで『おつり』が来ることが多いからな・・・。」とも。つまり、暴力的な指導は「指導」にならずに逆効果で、卒業式後の『お礼参り』（対教師暴力）などの弊害が多いという話です。（大声などの威嚇(いかく)も同じです。）40年あまり前のことですから、『体罰』などという言葉も聞きませんでした。でも、暴力がより立場の弱い者への暴力を生むこと（暴力の連鎖）だけは語られていました。

そんな中で、「**口で泣かす**」とは？ 私は、すごく新鮮な言葉として覚えています。「子どもと話し込んで、決して威圧ではなく、教師の話の中身で子どもが泣く。」そんなことを教えてもらいました。また、私の目の前で、先輩が子どもを『口で泣かして』いました。**キーワードは「琴線に触れる」**です。

特に課題の重い子ども（どの子も課題を抱えているので、「特に」をつけます。県教委もこの表現です。）の生活背景を知り、その子が何に悩み、何を求めているのか？ 実は、子ども本人にもわからないことが多いのです。ちょうど毛糸の玉がこんがらがってしまったような、そんな心の内でしょうか。だから、イライラしてしまうのです。そんなとき、力のある子は暴力的に爆発させてしまいます。モノを壊したり身近な人に暴力を振るったりします。逆の子は、内にこもることがあります。現象としては自傷行為や不登校・ひきこもりなどです。子どもの行動には必ず背景があるとされます。今日(こんにち)、SSWの先生はそうした背景を科学的に分析し、環境改善の提案をしてくれます。昔はそうした配置はありませんから、教師は一生懸命探り、たどり着いたのが『琴線に触れる』です。

私たちの先輩は、こうした特に重い課題を持つ子どもの心を丁寧に解きほぐし、ちょうどこんがらがった毛糸を解きほぐすように気持ちを整理していったのです。でも、ただ整理するだけでは子どもが泣くことは少ないです。（別に、泣かすことが目的ではありませんが・・・）整理していく中で、そうしたきびしい状況の中で「甘えている」「甘えざるを得なくなっている」、あるいは「間違っただけを出し方をしている」ことを指摘し、正しい方向に導く支援をしたとき、子どもは一瞬にして涙を流します。それこそポロポロっと！ それは、子どもの心の奥にこめられている心情に教師の言葉が刺さった瞬間です。子どもは「この先生は自分のことをみんな知ってくれている。」「本当に自分のために考えてくれてる！！」と確信するのです。子どもの心と教師がつながったのです。こうした経験を一回でもすると、もう教師という仕事はやめられません。「**教師冥利**」とでもいうような心持です。

先輩たちは、そうした支援や指導をするために課題の重い子どもの生活背景を探りました。その一番のヒントを得られるのが「家庭訪問」でした。子どもの家に行くと、その子の生活、親の生きざま（生いたちや仕事に対する思い）の中に、宝石のようにちりばめられた子どもへの指導のヒントがありました。これは何十年たっても変わるものではありません。そんな「**宝物**」を拾いに家庭訪問に行くのです。電話ではわかりません。昔は「5分以上の電話はするな！」と言う先輩もいました。電話で親と『つながる』ことはできません。子育てに悩む親ほど先生とつながりたいと思っています。また、「週にいつべんぐらい家庭訪問できるように仕事しいや。」と言う先生も。（プロの教師としての大切な心構えでしょうね。）「〇〇〇でがんばったから、（この子の）お母ちゃんに伝えに。」「子どもが3日休んだら、とにかく（家に）行って顔見て来る。」「宿題忘れが3回続いたから。」・・・

きっかけは何でもいいんです。それが家庭訪問の『口実』です。この点、中学校は簡単です。中間や期末という定期テストがありますから。「ちょっと勉強のぞきにきました。」と言えば、それでどこの家（うち）でも行けるんですから。

ところで、**親とつながるのが上手な先生は、家庭訪問の電話(予約電話)をしません。**気軽に家に行き、お客さんなどがあってダメだったら、また、次に行ったらいいんです。「また、来ます。」の一言で帰ればいいのです。構えていくような訪問だから大変なんです。もちろん、万引きやタバコなどの生指にからむものは別ですが・・・。

私、いっぺんどこかの小学校の研修会で「子どものことを抜きにした家庭訪問を！」と話したことがありました。終わってから若手の先生が2人やってきて、「先生、宿題忘れとか万引きなんかの問題行動なら、私、なんぼでも家へ行って親としゃべります。けど、子どもの話をしない訪問なんて、（親と）何しゃべってええかわからんのに、よう行きません。」と言われました。

親としゃべることは実はいっぱいあります。親がいっぱい持っておられますし、先生自身もお持ちです。ただ、今までそういうことを話したことがないだけなんです。もう少し具体的に書きます。まず、一番聞きやすいのは昔の野洲の状況です。「私、出身が〇〇市なんで、この野洲のことはあんまり知らないんです。」とか、「子どもたちに郷土の学習をするための参考に。」とでも言えばいいのでしょうか。これなら、日頃子育てをお母ちゃんまかせにしておられるようなお父ちゃんにも有効だと思います。「子どものころはこうだった。」などと、いっぱいお話がきけるのでは。また、「昔の遊び」なんかもあります。さらに、親の出身地が先生のお家の近くだったら、「昔はこうでしたね。」などと話すこともできますね。そういう話の中に、「けど、先生、今の子はかわいそうやなあ。」という一言でも出てきたらチャンスです。そこからわが子に対する『親の思い』を聞いていく糸口になるんですから。そういう話はこちらから「お子さんをどう思われますか？」って聞かなくても、相槌を打つだけで親から語ってくれます。こうして『親の思い』を聞いていくんです。「わしは小さいとき〇〇で苦労したから、せめてこの子だけには・・・。」という思いなどが結構出てきます。

それから、「親の仕事」もいいと思います。聞いていく理由は何とでも。仕事のことは一応みなさんその道のプロですから、かなり詳しく聞けると思います。もし、仕事をされていないようなら、昔についておられた仕事でもいいでしょう。また、仕事ができなくなったことについては、これは、もう少し人間関係をつくってからにしましょうか。

とにかく、**親といろいろ話をする事で「つながり」をつくる**ことです。特に課題の重い子の親とは、そういう関係が一番子どもにいい指導をする力になります。

一方、親もわが子の前では『いい親』をめざしておられます。けれども、子どもは見抜きます。ですから、「お母さん（お父さん）、何もカッコつける必要はありません。」と伝えましょう。でないと、仮面をかぶり続けるのはしんどいからです。）「昔、やんちゃやってたらやってたでいいんです。親になった今それに気づいて、『あんたにはお父ちゃん（お母ちゃん）と同じ間違いを踏まんといてほしい。』という親の願いを子どもに語ることのほうが、ずっとすばらしいですよ。」と支援したらいいのでは。

でも、こうした**突っ込んだ話を親御さんとするには、教師のほうも「裸」になって自分を語る必要があります。**「なぜ教師になったのか」「教師になってうれしかったこと、つらかったこと」など、精一杯自分のことを親に伝えるのです。「親と担任」という関係ではなく、**一人の人間としてつながるために。**教師が「裸」になると、親は自然と心を開いてくれます。『つながる』って楽しいですよ。

まもなく始まる定例の家庭訪問。一段落したら、私が今述べた家庭訪問に挑戦してくださればと思います。保護者さんが情報いっぱいくれますよ。それが教育を進める大切なヒントにもなります。